ロフラゼプ酸エチル

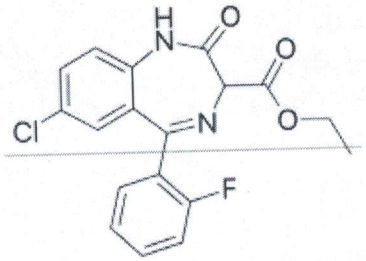
乙第25号証

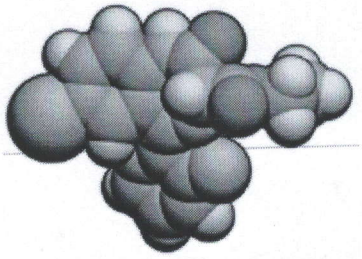
出典: フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』

ロフラゼプ酸エチル (ethyl loflazepate) は、ベンゾジアゼピン系の緩和精神安定剤、抗不安薬の一種。日本では、1989年よりメイラックスという商品名で、明治製菓（現Meiji Seika ファルマ）より発売され、適応は神経症や心身症における不安・緊張・抑うつ・睡眠障害である。

連用により依存症、急激な量の減少により離脱症状を生じることがある[1]。向精神薬に関する条約のスケジュールIVに指定されている。麻薬及び向精神薬取締法の第三種向精神薬である。

ロフラゼプ酸エチル





IUPAC命名法による物質名

IUPAC名 [表示]

臨床データ	
胎児危険度分類	?
法的規制	US: スケジュールIV
投与方法	経口
薬物動態データ	
生物学的利用能	?
代謝	肝臓- CYP3A4
半減期	122時間
排泄	腎臓
識別	
CAS番号	28911-01-5
ATCコード	N05BA18 (WHO)
PubChem	CID: 3299
DrugBank	?
KEGG	D01293
化学的データ	
化学式	$C_{18}H_{14}ClFN_2O_3$
分子量	360.7

目次

薬理特性

適応

- ガイドライン
- 研究事例

注意

- 一般的注意
- 禁忌事項
- 副作用

ジェネリック医薬品

出典

関連項目

薬理特性

ベンゾジアゼピン系の中では特に作用時間が長く、作用もやや強い。血中半減期は60～300時間の超長時間作用型である。鎮静作用、意識水準の低下、筋弛緩作用はやや弱い反面、抗けいれん作用や抗コンフリクト作用が強い。抗コンフリクト作用は5mg/kgで認められ、その強度はジアゼパムの2倍、ロラゼパムの8倍である。

適応

日本で承認されている適応は、心身症や神経症における不安、緊張、抑うつ、睡眠障害である。

- 錠剤:1mg,2mg
- 細粒:1%

他害行為と抗うつ剤との因果関係が否定できない症例が確認されたことから、2009年5月に厚生労働省より添付文書の改定を指示され、［重要な基本的注意］「自殺企図」の中に「攻撃性」のリスクが明示された。

離脱症候群

「SSRI離脱症候群」も参照

多くの向精神薬は投与の中止時に離脱症候群を引き起こすことがある。パロキセチンはこのカテゴリの薬品では最も高い確率でインシデントを起こし、また深刻な離脱症候群を引き起こすという証拠が存在する[19]。パロキセチンの離脱症候群に共通しているのは、吐き気・目眩・立ちくらみ・不眠・悪夢・明晰夢・電撃の感覚・泣き出しと不安などがある[20][21]。パロキセチンの水溶液を用いることで、非常にゆっくりとした投薬削減が可能であり、それにより断薬症候群を減らすことができるであろう。別の勧告では、一時的にフルオキセチンに切り替える方法であり、それは長い半減期により離脱症候群の重篤度を減少させることができる[9][22][23]。

禁忌

以下に当てはまる患者には、投与不可。

- 児童青年。NICEのガイドラインではパロキセチンおよびベンラファキシンは、児童青年のうつ病治療として使用してはならない（should not be used）と勧告している[24]。NICEが18歳未満に許可している抗うつ薬はフルオキセチンただ1つのみであり、深刻なうつ病に限定され、かつ心理療法を併用しなければならない[7]。
- パロキセチンに対して過去に過敏症を示した患者。
- アトモキセチン服用者[25]。
- MAO阻害剤を服用中か、服用を中止してから2週間に満たない患者。
  - 脳内のセロトニン濃度が高まるため。
- 塩酸チオリダジン（商品名：メレリル）投与中の患者。
  - パロキセチンが薬物代謝酵素の働きを妨げ、チオリダジンの血中濃度が上昇する危険があるため。
  - 心室性の不整脈や、心電図上でQT時間が延びると言った、心臓の動きにかかわる重い副作用を伴うため。
- ピモジド（商品名：オーラップ）を服用中の患者。
  - チオリダジンのケースに同じ。

また、パロキセチン服用中は、セント・ジョーンズ・ワートを含む食品を摂取しない様にする事も肝心である。摂取すれば薬の効用を高めてしまう危険性がある。